

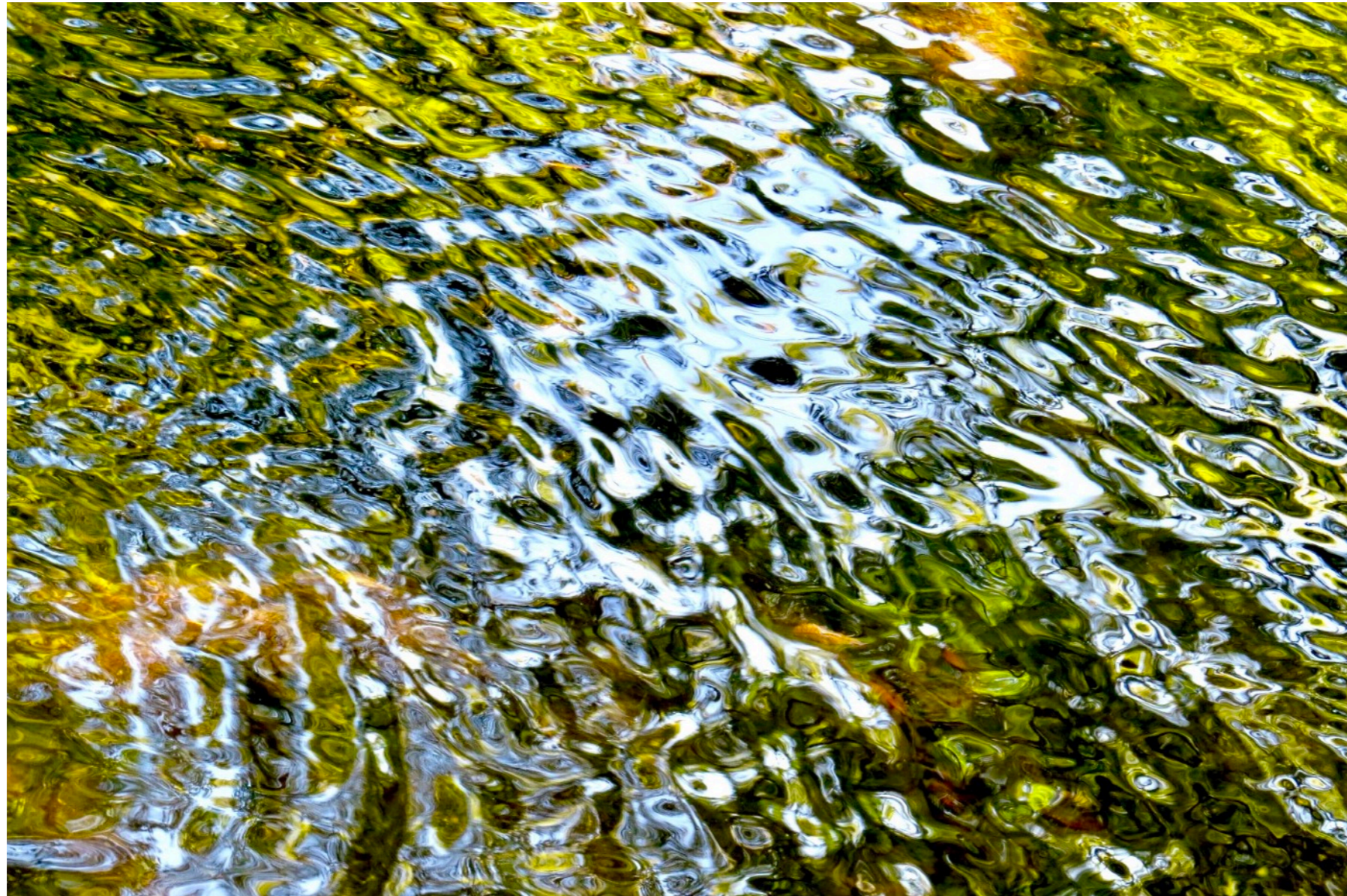
神秘学ポエジー 風遊戯
photopos
119

【神秘学ポエジー～風遊戯 第 238集】 photo ヴァージョン

photopos 2951-2975

《2022.10.7～ 2022.10.31》

神秘学遊戯団



わたしたちは
なにかに導かれている

それがなにかは
わからないままに

それは偶然ともよばれ
運命ともよばれるだろう

わたしたちは
なにかを求めている

それがなにかは
わからないままに

それが創造につながることも
破壊につながることもあるだろう

わたしたちは
なにかになるうとしている

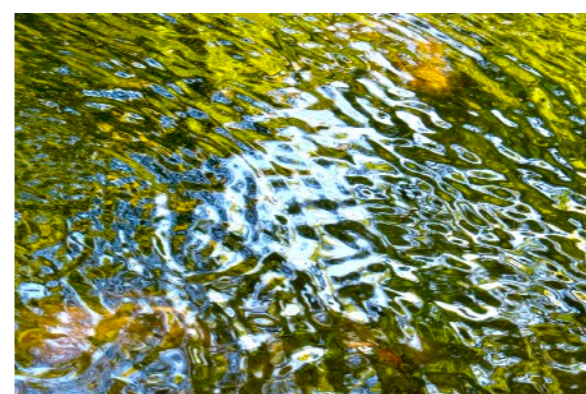
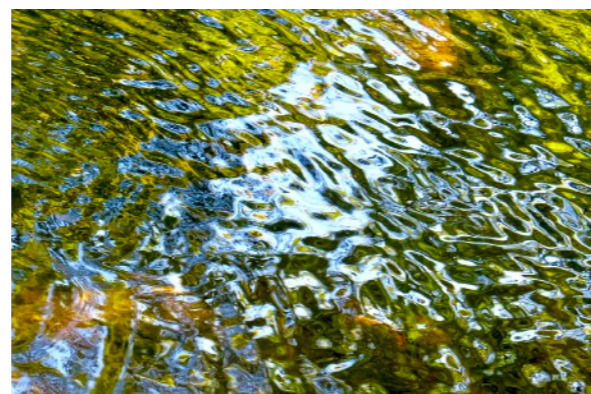
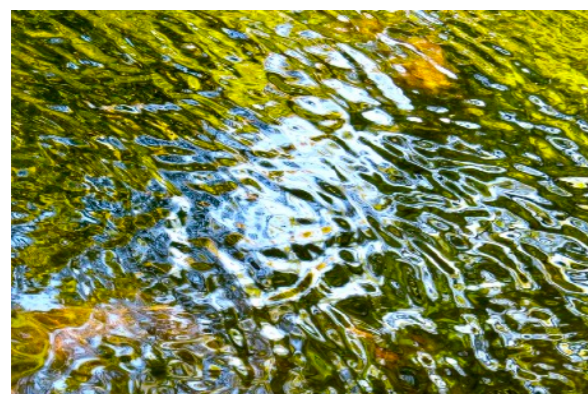
それがなにかは
わからないままに

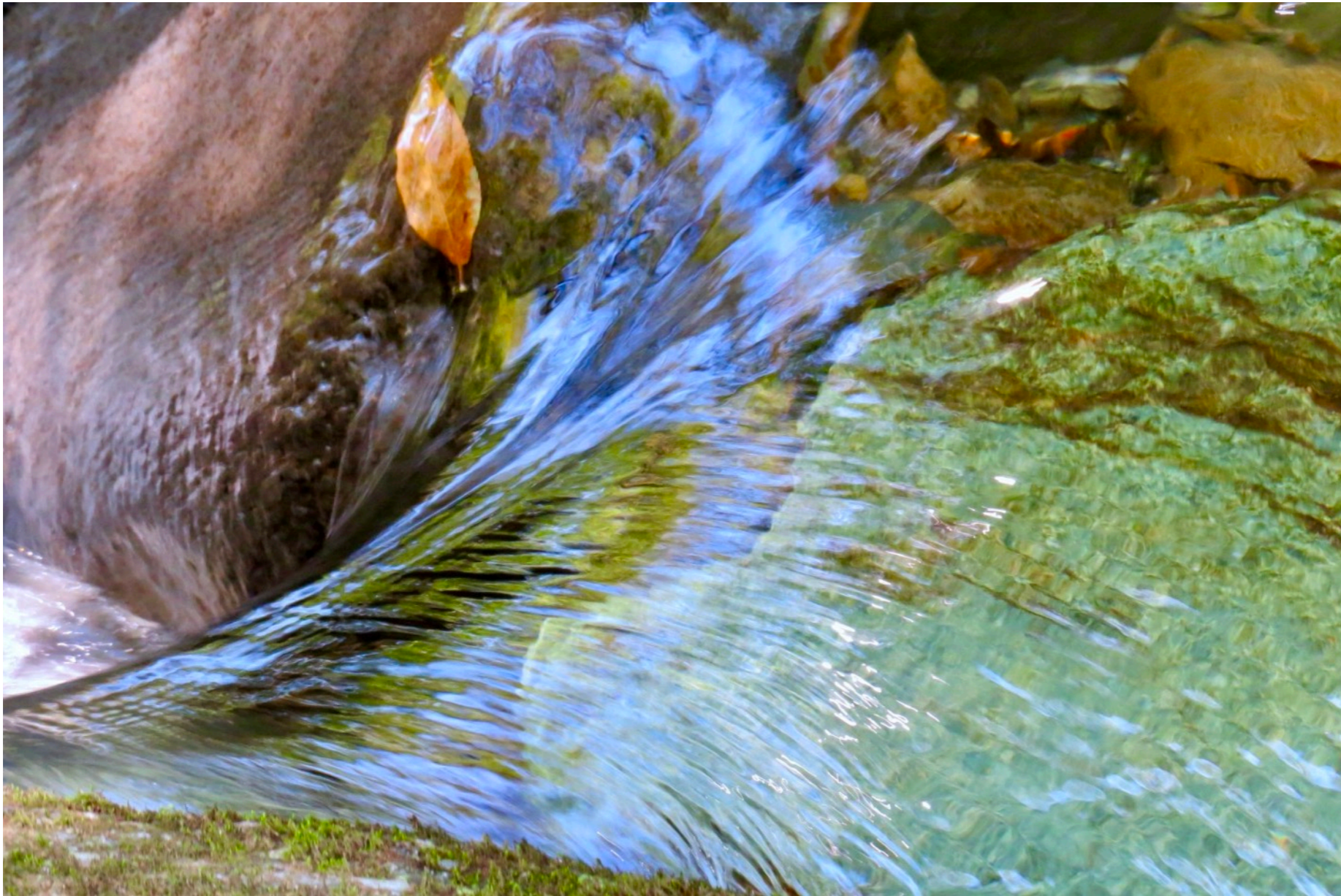
それが未来への道となることも
過去への回帰となることもあるだろう

わたしたちは
どこかへ行こうとしている

それがどこなのかは
わからないままに

それは彼岸ともよばれ
どこにもない場所ともよばれるだろう





群れから
はなれている

群れのなかでは
群れのすがたが
見えなくなってしまうから

正しさから
はなれている

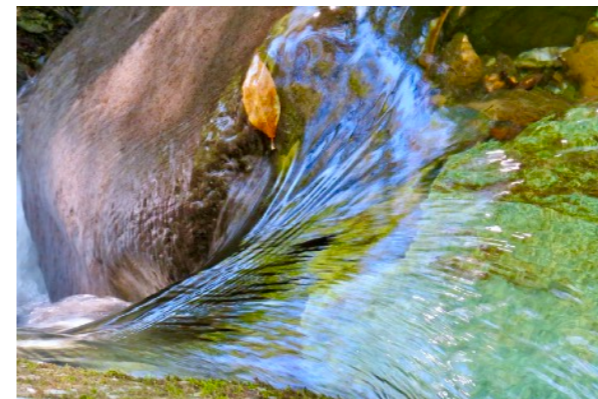
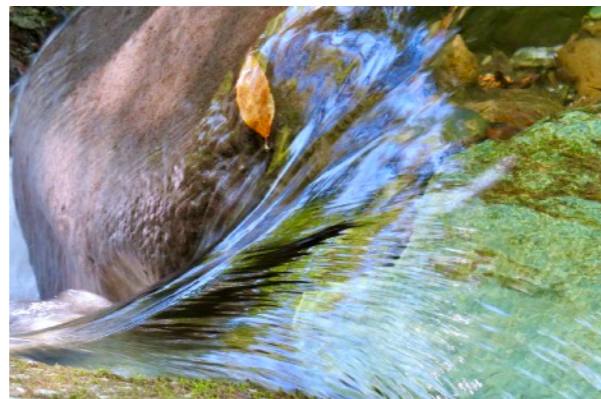
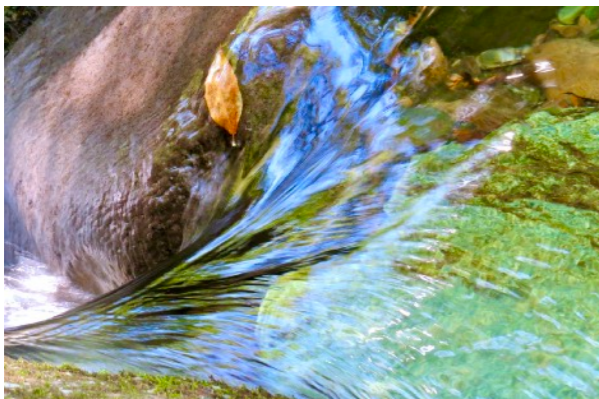
正しさのなかでは
正しさのすがたが
見えなくなってしまうから

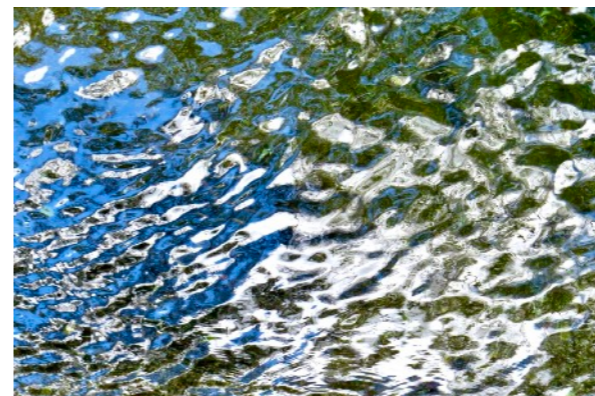
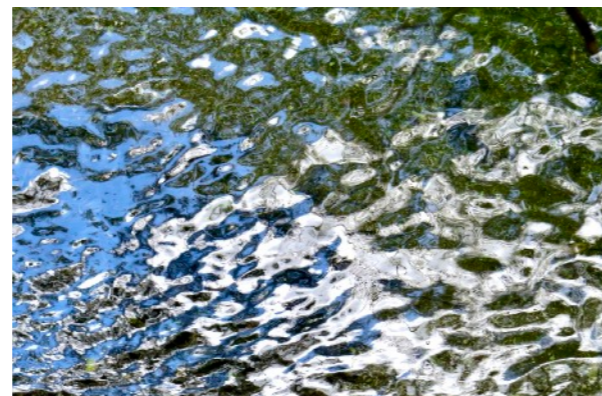
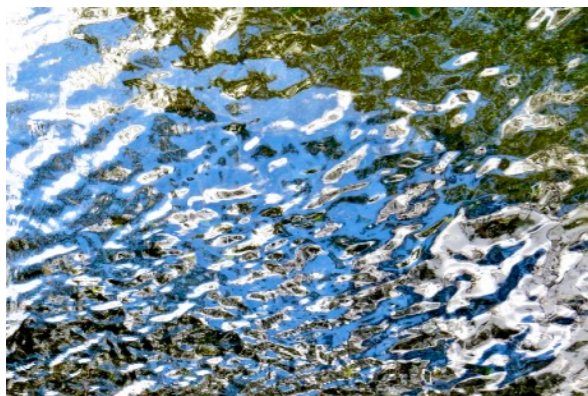
答えから
はなれている

答えになるまえの
問いそのもののなかに
あらたな問いをも見るために

わたしから
はなれている

わたしの外から
わたしのことを
見ることができるように





星の数ほど
本があるとしても
一生のあいだに
読める本は限られている

読みたくなくても
読まねばならなかったり
読みたくても
読めなかったりする

無人島やら刑務所やらに行って
ほんのわずかの本しか
手元におけなかったりするとしたら
なにを選ぶだろうか
そんなことを考えたりもする

面白い本か
知恵の得られる本か
詩歌か
言葉のたくさん詰め込まれた辞書か
それとも写真や絵がたくさんはあったのか

けれど別に本など読まなくても生きていける
そして本を読んでも読まなくても死んでいける

おなじように
これだけたくさんの方がいるのに
一生のあいだに
会える人は限られている

会いたくなくても
会わなければならなかったり
会いたくても
会えなかったりする

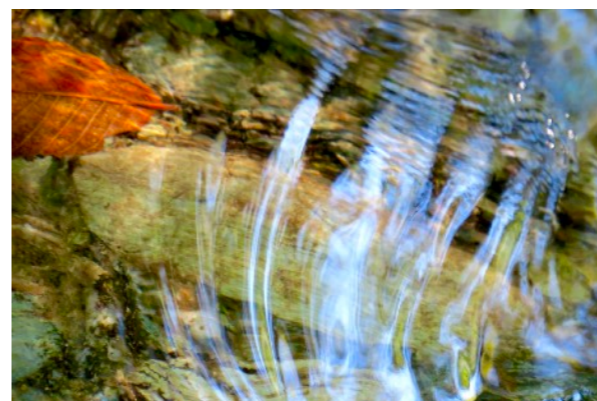
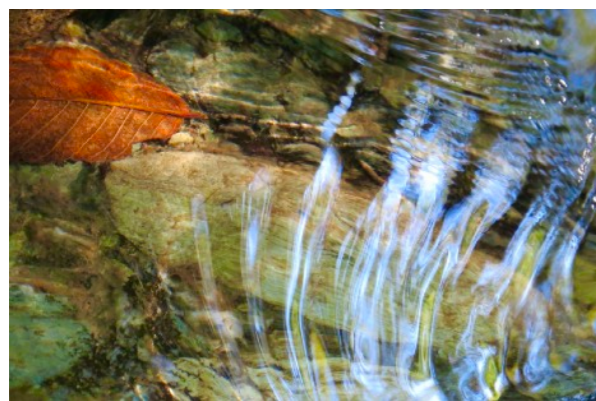
人にそんなに会わなくても生きていけるけれど
かけがえのないいい人だけには出会いたい
そしてずっといっしょにいられますように



奇跡は
いつでも
起こっている
奇跡でないことはなにもない
ただそれを
奇跡だとは思えないだけ
ひとは奇跡に
日常という衣装を着せているから

不思議は
いつでも
ここにある
不思議でないことはなにもない
ただそれを
不思議だとは思えないだけ
ひとは不思議を
あたりまえという言葉で呼んでいるから

永遠は
いつでも
ここにある
永遠でないものはなにもない
ただそれを
永遠だとは思えないだけ
ひとは永遠を
未来のどこかに見ようとしているから



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて



言葉が
生き物のように
見えるとしたら

わたしの言葉は
どんな姿をして
なにをしているように
見えるだろう

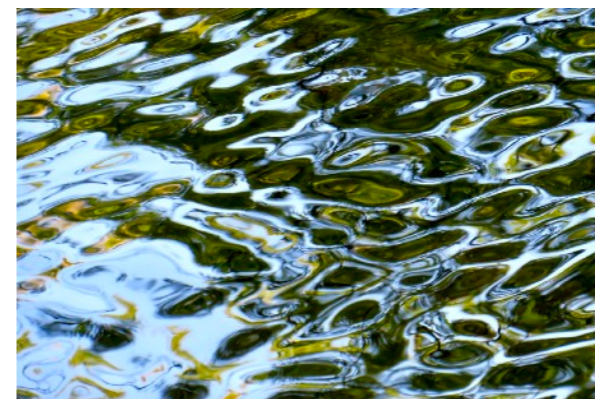
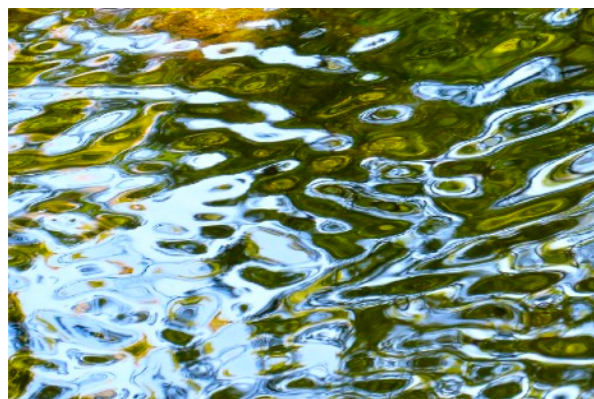
心がひとときも
じっとすることなく
変わりつづけているように
言葉もまた
変わりつづけているはずだ

そして同じ言葉でも
わたしの言葉は
だれかの言葉とは
ちがう姿で生きている

すべての言葉が
生き物のように
見える世界があるとしたら

世界はどんな姿に見えるだろう
そしてその生き物たちは
どんな生態系をつくっているだろう

その世界がかぎりなく自由で
美しい姿でありますように





どこにも
逃げる場所はない

死の世界さえも
逃げられる場所ではない

逃げる場所があるとすれば
この生の只中しかないから

私は死を選ばず
生まれてきたことを悔やむこともない

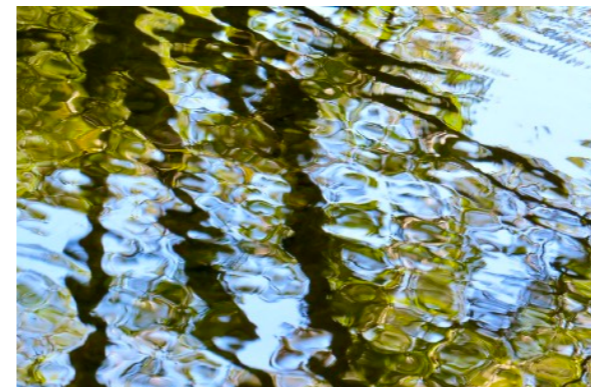
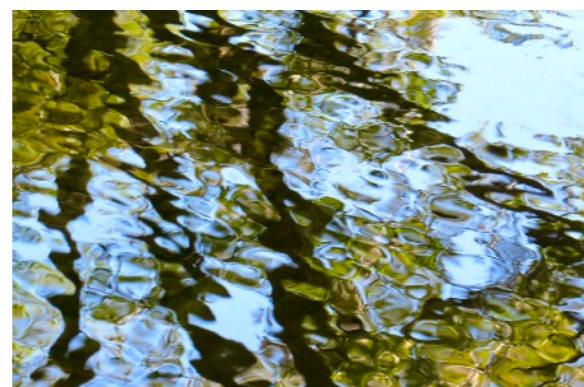
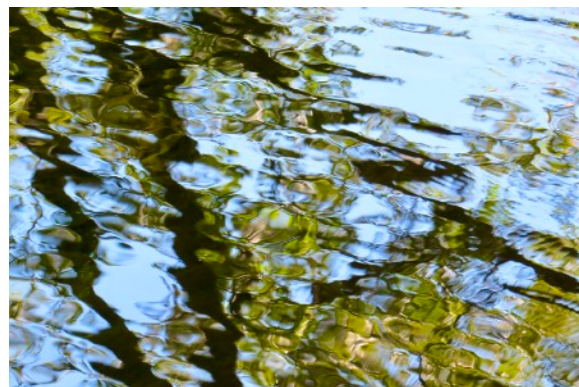
それでも生きることは
死を選ぶことよりもむずかしい

私は私であることを
どこまでもどこまでも抱えながら

私でない私をも
生きねばならない

生と死を貫き
それらをともに超え出る場所を求めて





※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

言葉を使うためには
生まれもった言語感覚で
生まれたところで使われている
言葉を学ばなければならない

わたしたちはその言葉で
世界を分節化するが
そこに言葉がないとき
その世界は未分化のままだ

言葉で表せないとしても
それについて考えることはできるが
たしかに考えるためには
言葉の力のもとになっている
魔法の感覚を使う必要がある

世界を分節化する言葉も
その魔法の感覚から生まれている

その魔法の感覚は
ふだんは眠ったままで
言葉を使っているときも
ほとんど言葉に使われてしまっているから
言葉を使うためには
たしかに考える力を身につけなければならない

たしかに考える力は
分節化された世界を見ることも
未分化の世界を分節化することも
すでに与えられた分節を
あらたに作りなおすこともできる

世界は魔法に満ちているが
すでに与えられた言葉に使われているとき
それは見えないままだ

魔法の力をポエジーという
それはだれでもが生まれもっている種だが
それを育てるものはまれだ



ことばは
どこから
生まれたか

ことばは
世界を映すのか
世界に映されるのか

語れないことばは
世界のどこかに潜んでいるのか
それともどこかへ帰ってゆくのか

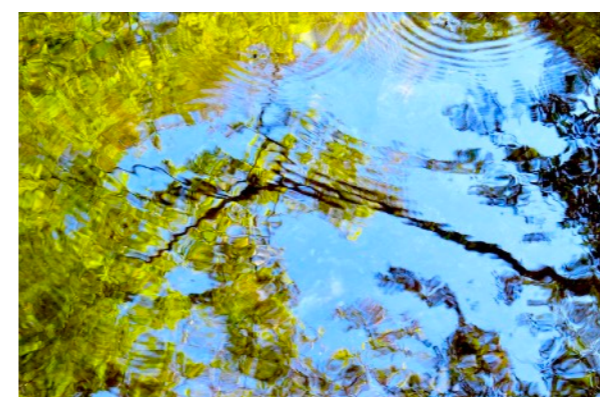
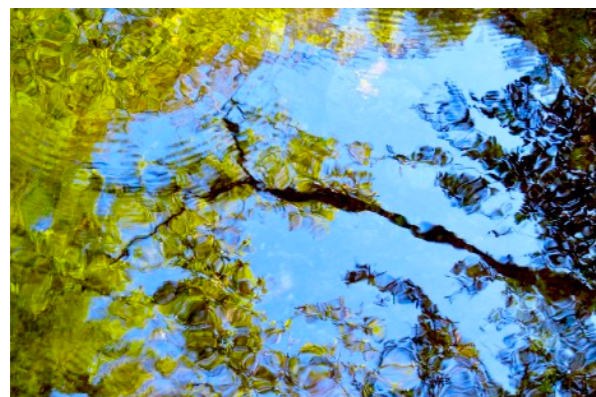
永遠のことばはあるのだろうか
こんな刹那のことばのなかで

数は
どこから
生まれたか

数は
世界を数えるのか
世界に数えられるのか

数えられない数は
世界のどこかに潜んでいるのか
それともどこかは帰ってゆくのか

永遠の数はあるのだろうか
計算されるばかりの数のなかで





光と
闇は
相補する

裏と
表のように

有と
無は
相補する

刹那と
永遠のように

偶然と
必然は
相補する

自由と
不自由のように

過去と
未来は
相補する

後悔と
祈りのように

水と
風は
相補する

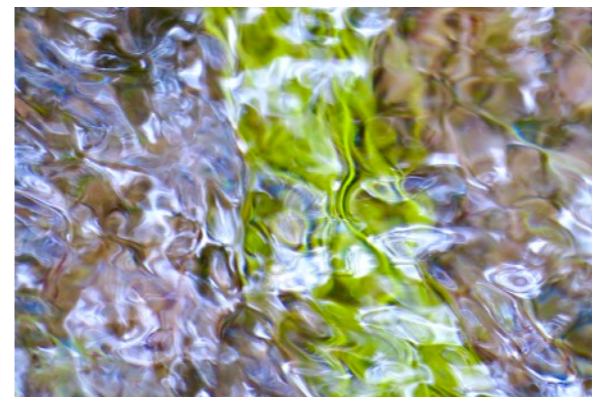
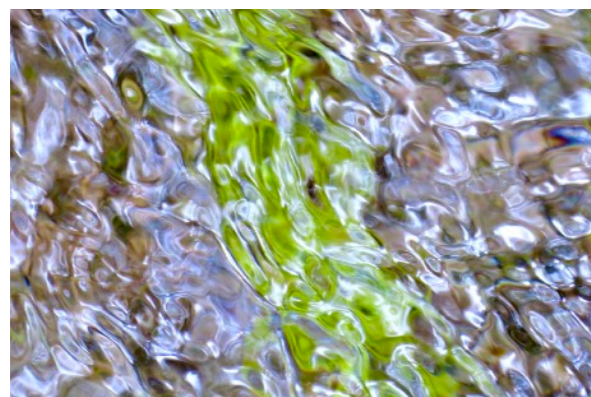
記憶と
忘却のように

夢と
現は
相補する

死と
生のように

私と
あなたは
相補する

此岸と
彼岸のように



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて



存在するものには
すべて役割がある

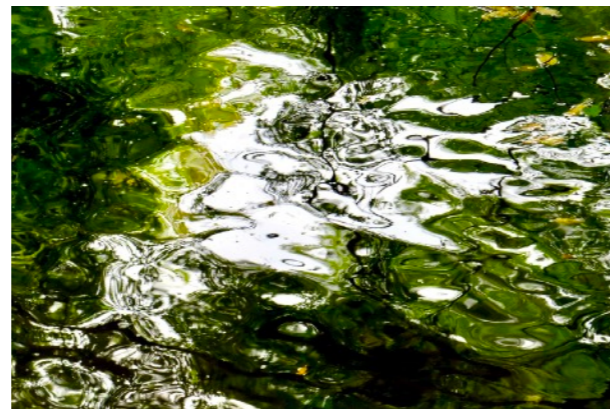
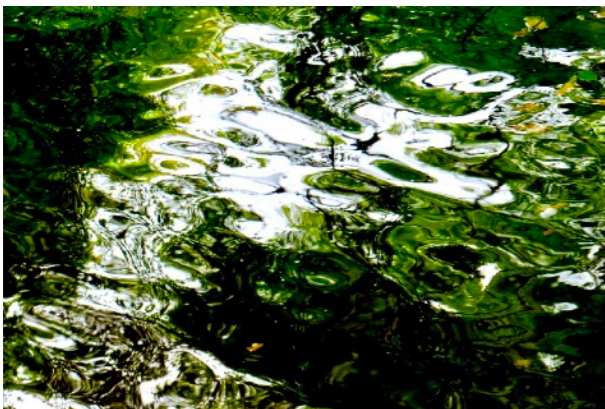
大切なものが失われたとき
それを補完するものがなければ
存在の連鎖はそこで途切れてしまう

見えているのに
見ていないものがあり
見ていないことで
失われるものがある

失われているのに
それに気づかないものがあり
気づかないことで
知らぬまに空白は広がっていく

失くしてはじめて
それに気づくものがあり
気づくことで
空白を埋めるために
はじめられることがある

失なわれたもののために
いったいなにができるのか
問いをくりかえしながら



※愛媛県久万高原町・古岩屋にて



何かが
迫ってきている

それが何なのか
わからないままに

すべてを蔽う
とぼりが下りようとしている

何が
光なのか
闇なのか

何が
善なのか
悪なのか

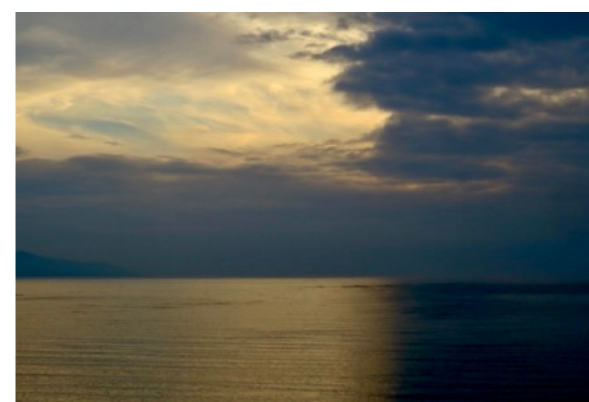
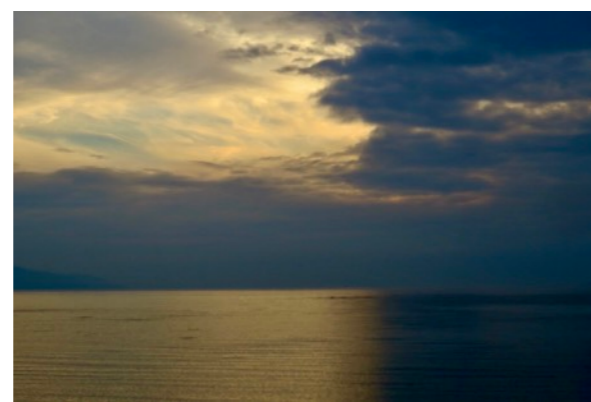
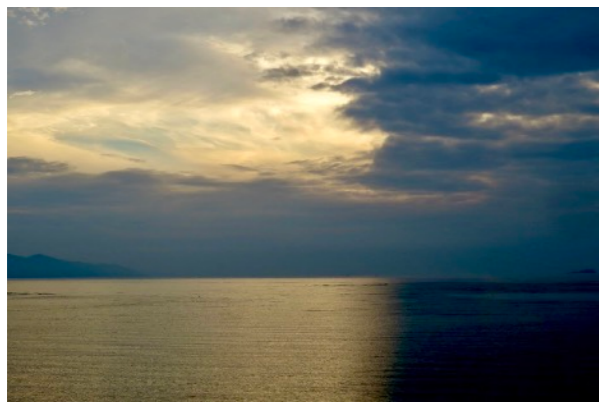
何が
真実なのか
嘘なのか

何が
正しいのか
そうでないのか

だれもが
答えを欲しがり
だれもが
勝手な答えを口々に叫ぶが

みずからが問いを
生きることしか
それが見つかることはない

迫りくるものの前で
心の声に耳を澄ませて





じぶんの時を生きる
ひとの時を
生きることはできないから

地球が太陽のまわりを
一周するあいだに
わたしにしかできないことをする

それがどんなに
些細なことであったとしても
わたしはわたしとして
地球の上で生きて
太陽のまわりをめぐる
あなたがあなたとして
そうしているように

そうして
何度も何度も
太陽のまわりをめぐるあいだに
わたしはわたしになってゆく
やがて地球をはなれ
わたしを超えた時へと向かうために





光や
水や
風のことばを知り
戯れ遊ばないのは
人間だろうか

社会や
共同体や
世間のあいだで
右往左往するだけが
人間じゃないはずだ

霊と
魂と
体をはたらかせ
天と地をむすばないのは
人間だろうか

主義や
信仰や
思想をまとめて
袋小路になるだけが
人間じゃないはずだ



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて

☆photopos-2964

2022.10.20



あなたの心が
知りたくて
心をたどってみるけれど

たどれば迷路
謎だらけ

じぶんの心が
知りたくて
心をたどってみるけれど

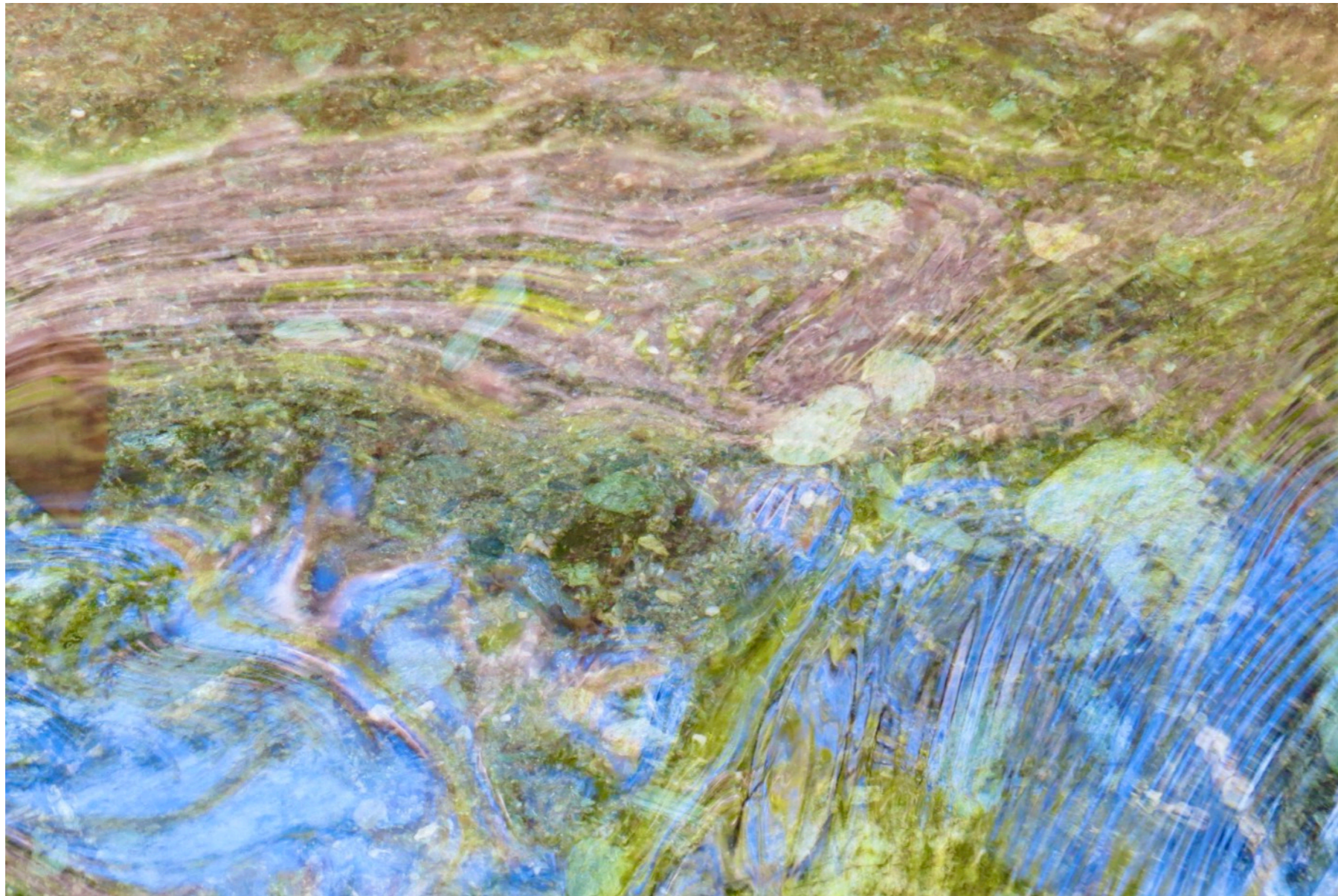
たどれば闇か
海の底

世界の心が
知りたくて
心をたどってみるけれど

たどれば彼方
果てもなし



※愛媛県松山市・重信川河口にて



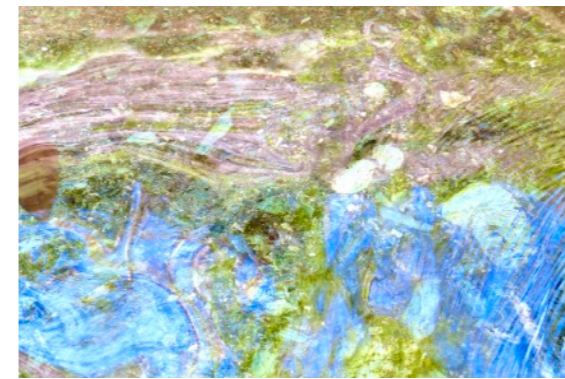
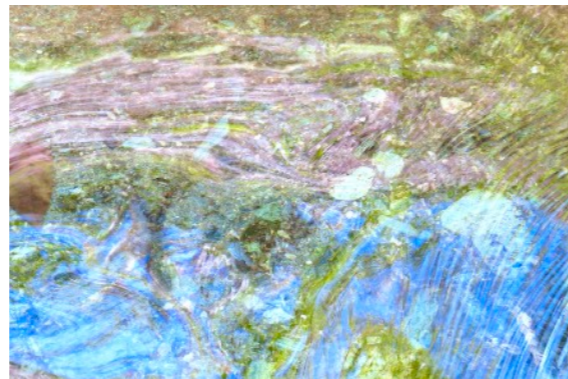
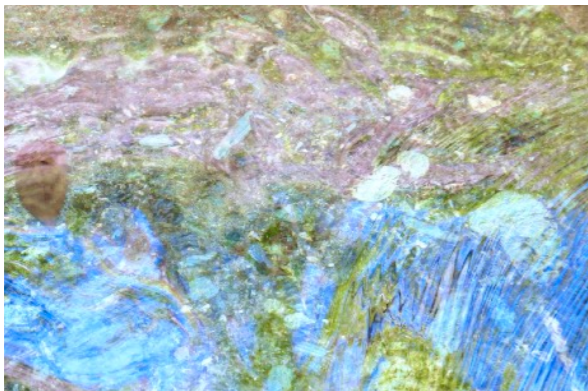
人は
自然であり
自然ではない

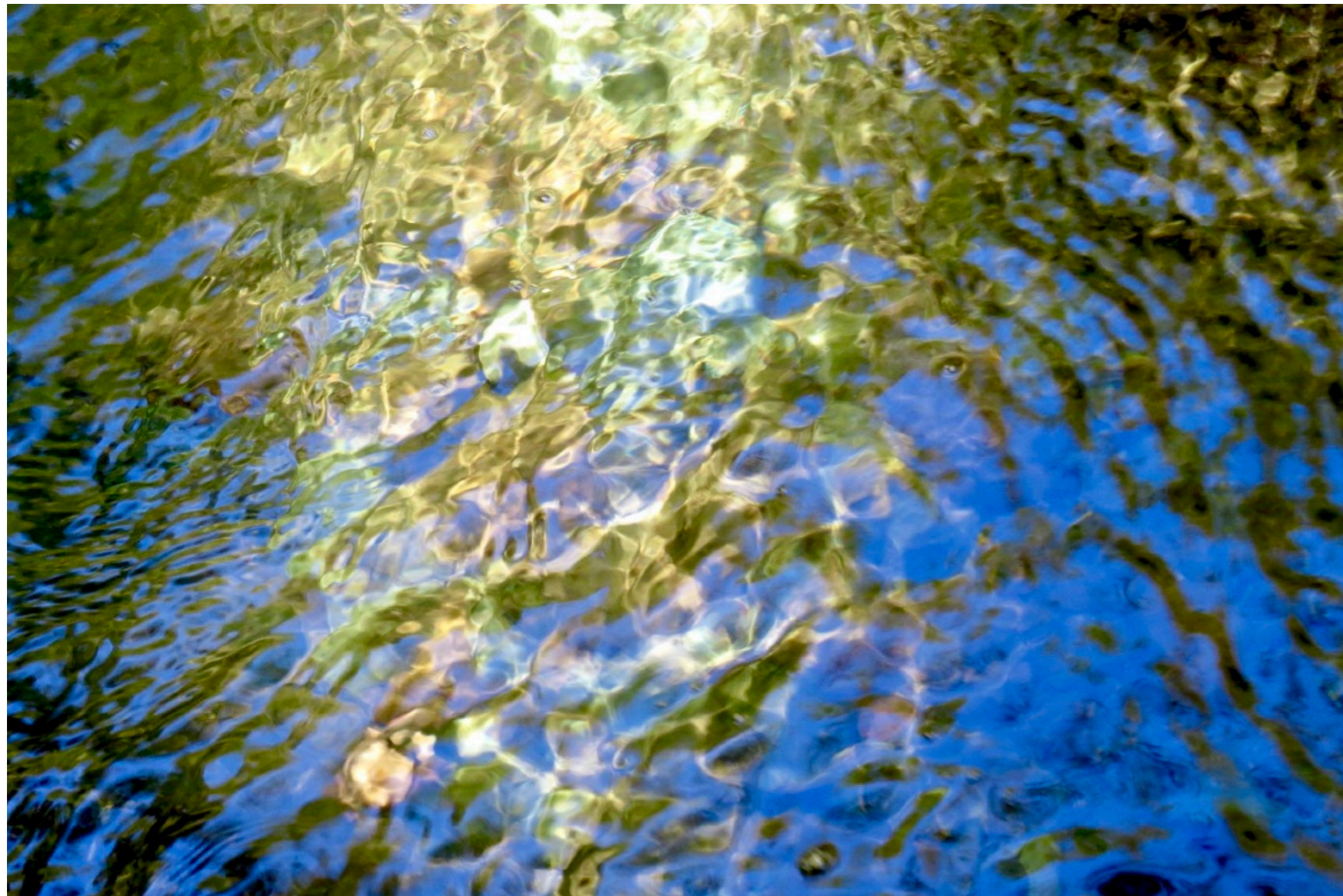
自然になることもできず
自然でないものになることもできない

人が
人であるためには
自然に近づき過ぎず
離れ過ぎないように

そのはざまを
生きていかねばならない

そこに神話をつくり
禁忌をつくり
また神話を新たにし
禁忌を新たにしながら





闇を隠す者よ
汝は
隠された闇によって
復讐されるであろう

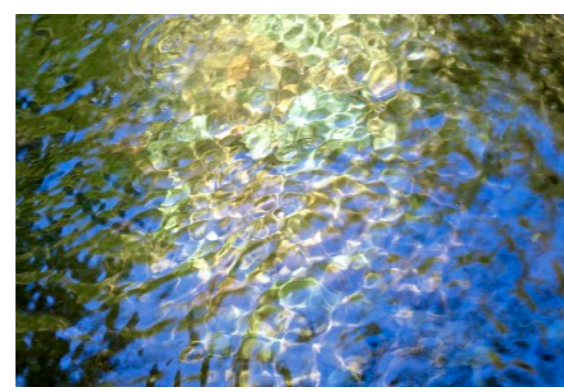
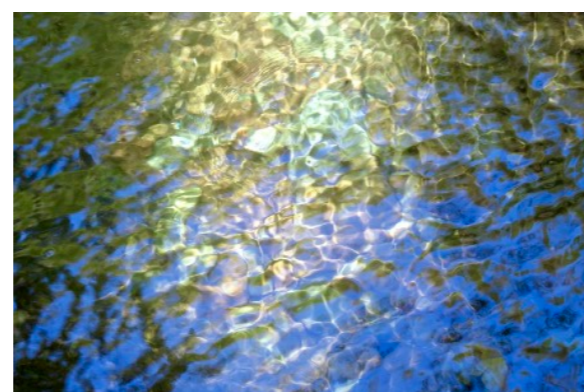
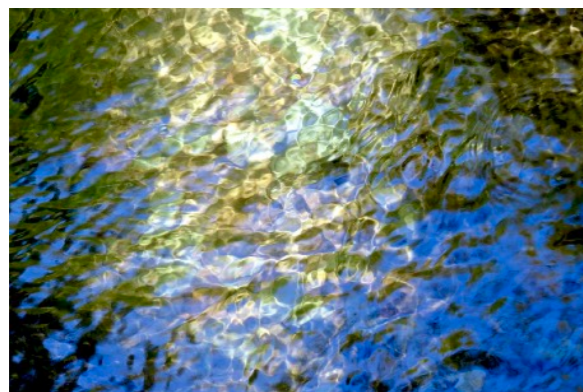
闇が闇だけでは
存在できないように
光もまた
光だけでは存在できない

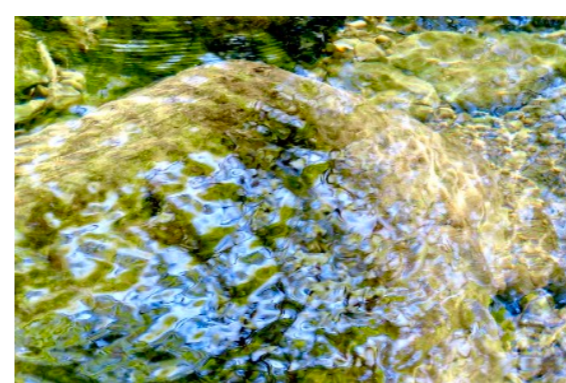
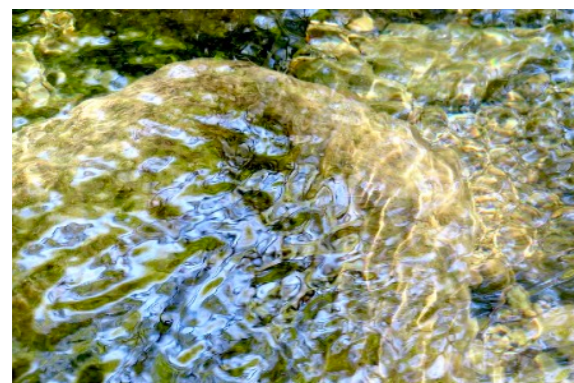
光が現れるとき
そこに闇もまた現れ
そしてそこに色が生まれる
色は光と闇の子供なのだ

ひとは色として生まれ
色のなかで光と闇を生きるが
光を求め闇を遠ざけるとき

遠ざけられ閉じ込められた闇は
見えないところから
知らず働きかけはじめ
ひとは闇に翻弄される

闇を恐れる者よ
汝はみずからが
闇でもあることを知らねばならない
そのときはじめて
真の光は汝の内より輝き出るであろう





だれが
隠すのか

なにを
隠すのか

なんのために
隠すのか

なぜ
隠すのか

どのようにして
隠すのか

秘密は
秘密であることで
力をもつから

秘密を漏らす者は
罰せられもするのだろうか

秘密が破壊を
もたらすことになるときに
それは開示されねばならない

開示されることで
秘密がその力を
行使できなくなるように



どこからか
影は現れ

わたしのなかに

気づいたときには
影は踊り

わたしのなかで

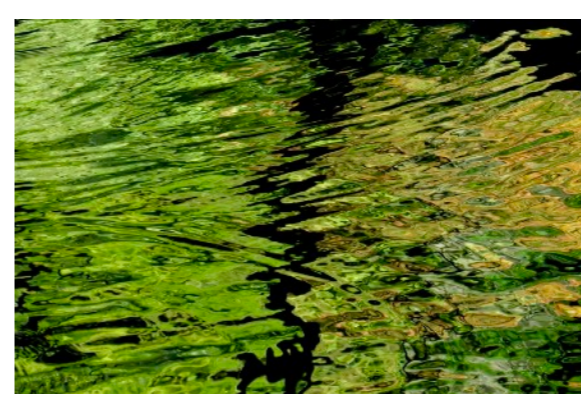
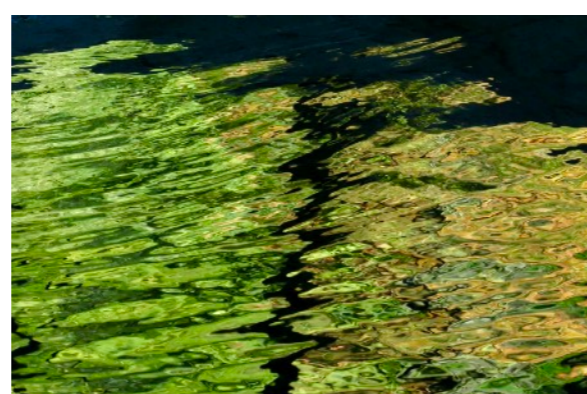
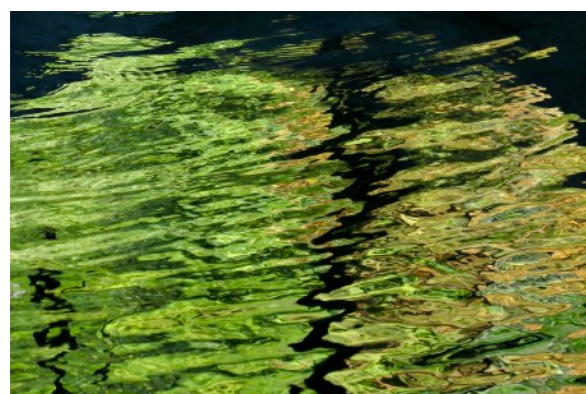
知らないうちに
影と踊り

あなたはだあれ

知らないところへ
影は誘い

あなたとともに

いつのまにか
わたしが影になる



☆photopos-2969

2022.10.25



夕暮れは
沈黙の光を
連れてくる

光の襲と
映る不可視の心

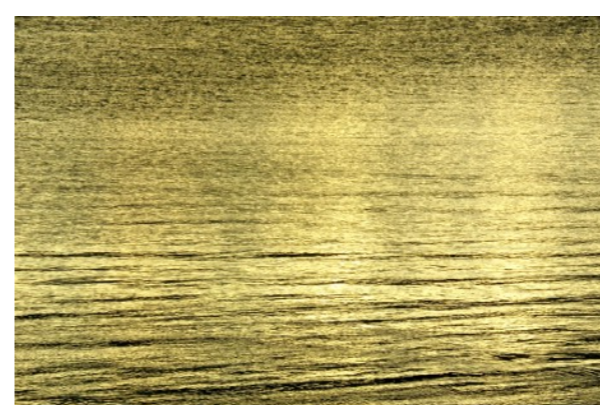
たとえ
俗のなかで
生きるとしても

つかのまの
脱俗した時間の奥に潜む
永遠のなかで

媚びないでいる
自由であるために

偽りの善は要らない
偽りの言葉は要らない

静かに暮れゆく
光のなかで
沈黙の深みを生きるのだ



※愛媛県松山市・重信川河口にて



狂気になることは易しい
ただ人々とともに
流されるだけでいい

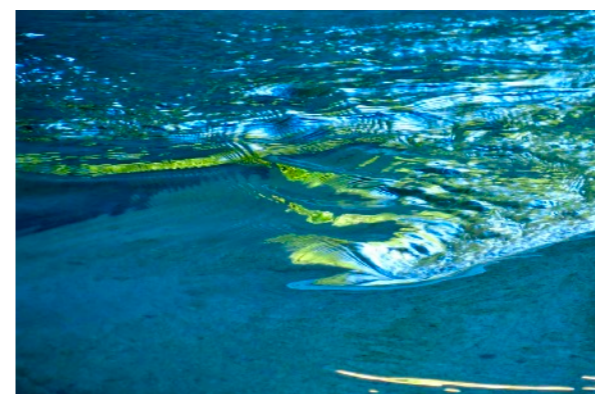
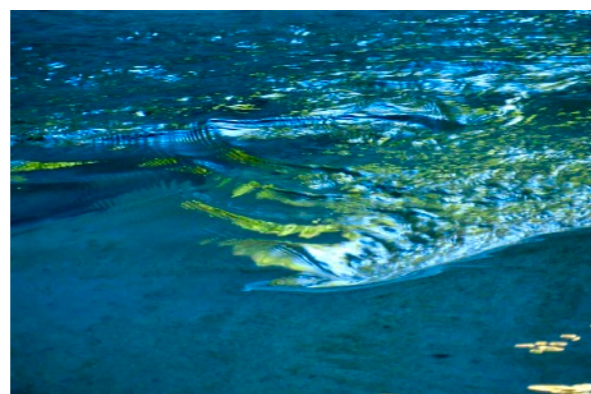
むずかしいのは
狂気を恐れず
狂気とともに生きながら
狂気から自由でいることだ

悪をなすことは易しい
ただ人々とともに
行動するだけでいい

むずかしいのは
悪を恐れず
悪とともに生きながら
悪から自由でいることだ

死することは易しい
ただ人々がそうなるしかないように
死んでいくだけでいい

むずかしいのは
死を恐れず
死とともに生きながら
死から自由でいることだ



☆photopos-2971

2022.10.27



求めるものが
わたしの場所を決める

禁欲は成立しない

求めないものを
求めることはできないから

想像できるものが
わたしの世界になる

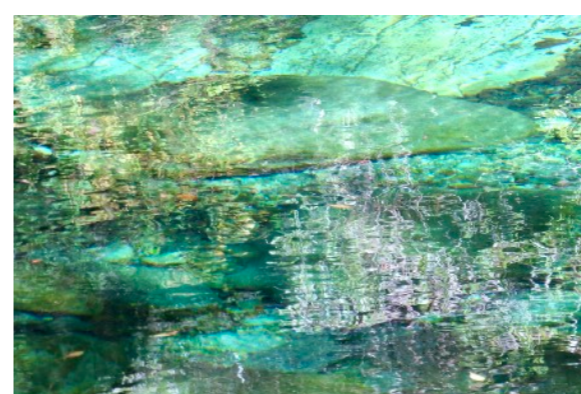
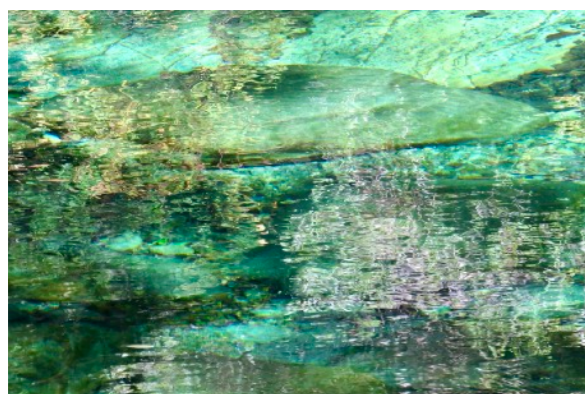
想像を超えたものは存在できない

想像できないものを
想像することはできないから

然るべきことが
わたしに訪れる

偶然は存在しない

然るべきでないことは
求められてはいないから



※愛媛県久万高原町・面河溪にて



終わりの始まりと
始まりの終わりのあいだで

終わりは説かれ
始まりは説かれ
説く者は絶えないだろうが

彼らは何も知らずにいる
終わるのはなにか
始まるのはなにかを

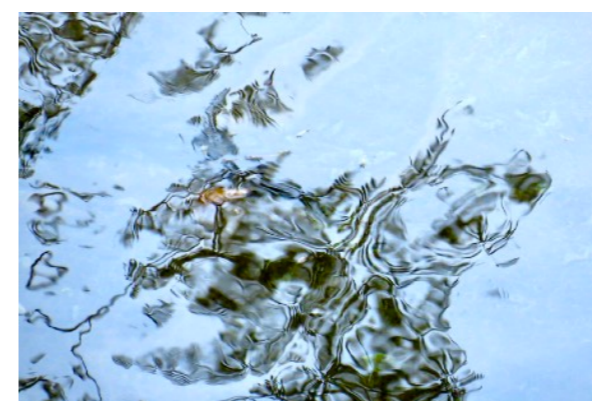
失われるものは多く
得られるものは少なく
それを嘆く者もまた絶えないだろうが

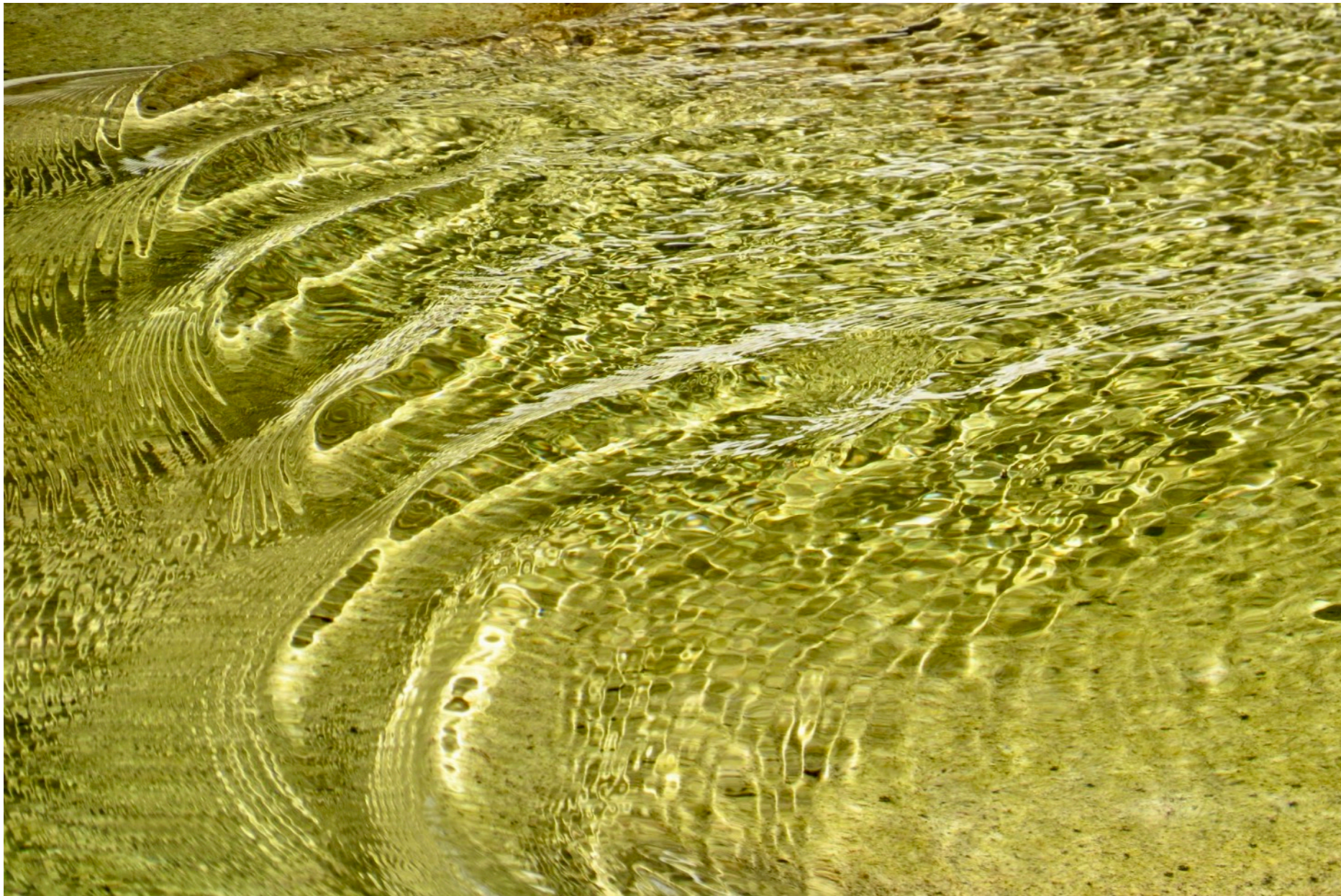
彼らは何も知らずにいる
真に何が失われ
真に何が得られるのかを

ひとり学ぶことしかできないのに
学びたい者が減り
だれにも教えることはできないのに
教えたい者が増えていく

そんななかでも
ひとり学ぶ者は絶えないだろう
そんななかでも
みずからを教える者は絶えないだろう

終わりの始まりと
始まりの終わりのあいだで





自由の翼には
自在な形がある

自在な形をつくるために
形を学ぶことで
じぶんだけの形をつくりだす

自由の翼が描く形はどんなだろう

自由な言葉には
自在な型がある

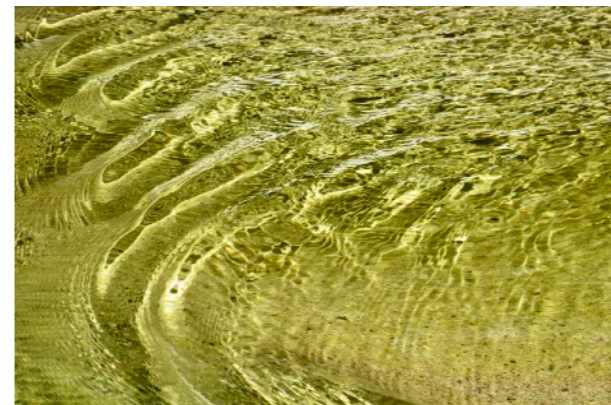
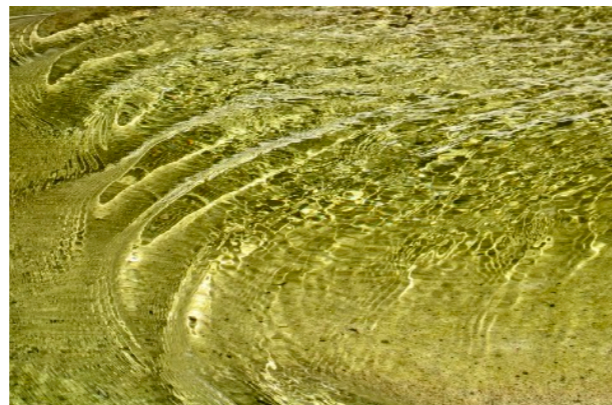
自在な型をつくるために
型を学ぶことで
じぶんだけの型をつくりだす

自由な言葉が語る型はどんなだろう

自由な歌には
自在な響きがある

自在な響きをつくるために
響きを学ぶことで
じぶんだけの響きをつくりだす

自由な歌が歌う響きはどんなだろう





録音された
じぶんの声を聞いて
じぶんの声だとは
思いたくないように

映し出された
じぶんの影を見て
それをじぶんだとは
思いたくはないだろう

たとえ録音されようと
映し出されようと
じぶんの声も
じぶんの姿も影も
そのまま聞き
そのまま見ることはできないから
そのことでひとは
どこか救われているところがある

信じることも
それに似ている

それは
直接知ることではない
そのまま知ることにはできないから
信じるという安心が生まれる

けれどそれは
いつかどこかで裏切りにあう
それが良き裏切りであることもあれば
悪しき裏切りであることもあるだろうが

いつかひとは
鏡を超え影を超えて
じぶんと直面するときがくる

それがやがては
自由と幸福へと
つながるものとなりますように





上ばかり
見てはいないか

足下は
見えているか
そこにある
大切なものや
闇へと向かう深淵が

純粹ばかり
求めてはいないか

濾過され
捨てられたもの
それらの姿は
見えているか

光ばかり
見ようとしてはいないか

光を見ようとするとき
光ではないものが
そこにあることに
目を向けているか

見ていないものに
目を向けるとき
世界ははじめて
その秘密を開示しはじめる

